

神奈川大学における学校ボランティアの取り組み

入江直子

1. 学校ボランティアの始まり

神奈川大学教職課程が教職を希望する学生の学校ボランティア活動に取り組み始めたのは、2004年度からであるといえる。それまでは、特別活動論や道徳教育論の非常勤講師をお願いしていた元横浜市立中学校長の高橋耕文氏から、小中学校の宿泊体験学習のボランティア等を授業で紹介され、単発で関わっていた学生はいた。そして2003年度には、工学部4年生で横浜市の中学の数学教員を希望する学生が、学校ボランティアを紹介してほしいと申し出て、松本中学校の個別支援学級のボランティアに週1～2日通い続けた。彼は、教員採用試験に合格し、横浜市立の中学校の教員になることができた。

このように、学校ボランティアに対する学校からの要望と学生の関心が広がりつつあったが、2004年度には、すでに神奈川大学を退職されていた高橋耕文氏が、浅間台小学校に赴任された両角英之校長からの学生ボランティアに対する要望を伝えに来学され、希望する学生を探すことから取り組みが始まったのである。3人ほどの学生がボランティアを希望し、週1～2日通うことになった。

学生たちは、朝の始業前から学校に行き、教師の手伝いをしたり、子どもたちと遊んだり、落ち着かない子どもの対応をしたり、と慣れないことを一日やって、初めはかなり疲れるようである。しかし、慣れてくると、子どもの

ようすなどをうれしそうに報告してくれる。そこで、学校での経験を記録しておくように促した。浅間台小学校では、金曜日に教師たちが校内で授業を見合って、放課後に授業研究会が行われているようで、金曜日にボランティアに行く学生は、授業研究会にも参加させてもらっていた。校長が学生ボランティアを要望したのは、「学校を開く」ことに向けてということで、継続的に通っている学生ボランティアは、そのうちスタッフの一人として位置づけていたでいていたようであり、AT（アシスタント・ティーチャー）と呼ばれていた。したがって学生にとっては、子どもとの関わりを学べるとても貴重な機会となった。

浅間台小学校には、2004年度から始まって、その後も毎年、3～4人の学生が週1～2日、年間継続してボランティアに通っている。そして毎年、その中の1～2人が小学校の教員採用試験に合格している。神奈川大学には小学校教員養成課程はないので、小学校の教員免許は、卒業してから他大学の通信課程等で取得する者が多いが、小学校のボランティアには、そうした卒業生が多く関わるようになった。

2005年度には、浅間台小学校から紹介されて、寺尾小学校にも3人の学生がATとしてボランティアに行くようになった。その中の1人は、4月・5月に子どもたちと関わった経験が、6月の教育実習と7月の採用試験の力になったと言っている。彼は、現役で出身県の中学校社会科の教員採用試験に合格し、卒業までボ

ランティア活動を続けて学んでいた。寺尾小学校では、特別支援教育の研究指定校として、特別支援教育を教師の連携によって取り組んでいたようで、ボランティアに行った学生は、その点で非常に勉強になったという。

2006年度になると、学生がボランティアに行く小学校がもう1校増え、また中学校も増えた。浅間台小学校・寺尾小学校に加えて、寺尾小学校から紹介されて、大口台小学校にも1名行くようになった。中学校は、近隣の栗田谷中学校、そして松本中学校に行くようになった。中学校では、英語や数学など教科の学習との関わりで、まず授業を参観したり、それから授業の中で個別に支援が必要な生徒に関わったりすることが多いようである。また後期になって、高橋耕文氏の紹介で戸塚中学校から要望があり、2人の学生が「保健室登校」の生徒たちの学習支援に関わるようになった。

以上が、学校ボランティア活動の始まりから2006年度までの活動の概略であるが、この間、教職課程として「学校ボランティア通信」を2005年度にNo.1 (2006.3.7)、2006年度にNo.2 (2006.7.11)、No.3 (2006.9.26)、No.4 (2007.2.24)と発行した。教職課程指導室でアルバイトをしながら学校ボランティアに行っている卒業生が中心になって編集しているが、学校ボランティア活動の記録として、そして、ボランティア活動をしている学生には自分の活動をふり返る機会になるように作成した。

2. 2007年度の取り組み

2006年度までは、学校から要望があった場合に学生に情報を提供し、関心がある学生がボランティア活動を経験するという動きで、こうした動きに関わっているのも一部の教員という状況であった。しかし、ボランティア活動に関わる学生の成長に接した教員たちは、学生が子どもとの関わり等の経験を、そこから学ぶことで、より実践的な力を獲得できる機会として、学校ボランティアの意義を実感し、2007

年度から教職課程として、より積極的に取り組んでいくこととした。

まず、学生にとって長くて貴重な春休み(2月・3月)を有効に使うことができるように、1月中に神奈川区内の中学校教員に「ご相談とお願い」(ボランティアの「御用聞き」)に複数の教員で回って情報収集をし、1月末に希望する学生に説明会をした。2006年度に学校ボランティアに行っていた学生も参加して自分の経験や学校からの要望を話し、教員が集めた新たな情報も説明して、自分の都合や希望が合った学生数人が、先輩が行っていた学校や新たなボランティア先にさっそく行くことになった。

新年度(2007年度)になって、改めて説明会を開いた。30名以上の学生が参加し、学校ボランティアに対する関心の広がりを感じたが、平日の半日くらいを継続的にボランティアに行くために確保するという時間的な都合がつかない学生が多く、結局、そのうち数人が、新たにボランティア活動を始めた。なかでも、「保健室登校」の生徒に関わる活動に対する関心は高く、前年度から継続している2名を含めて、5名の学生が戸塚中学校に通った。また戸塚中学校では、年度途中から、地域の人が運営する「土曜学校」(中学生の補習)の取り組みが始まり、そのボランティアにも関わるようになった。

こうして、2007年度には、前年度から続けている学生と新たに始めた学生を合わせて、約20名の学生が、継続的な学校ボランティアに関わった。そこで、学校での貴重な経験をふり返って、お互いに報告しあい、そこから学ぶ機会を何とか持ちたいと思い、1ヶ月に1回集まることを目標に「学校ボランティア報告会」を計画した。具体的には、学生と教職課程の教員が共通に集まれる可能性がある日程として、金曜日6限を設定し、前期は5月25日、6月29日、7月20日に行い、後期は10月5日、12月21日、1月30日に行った。このうち、7月20日は、学生のボランティア先の校長等教員の

方々に参加いただき、学生のボランティア体験のふり返りを通して、学校と大学が情報交流をめぐすという「学校ボランティア情報交流会」として行った。また、1月30日は、2008年度に活動をつないでいくために、後輩等への説明会もかねて行った。

こうした報告会を通しての学習をつなぎ、また活動をふり返っての記録としての「学校ボランティア通信」は、No.5(2007.6.20)、No.6(2007.6.20)、No.7(2008.1.29)を発行した。やはり、教職課程指導室でアルバイトをしながら学校ボランティアに行っている卒業生が、自分も書きながら編集している、それぞれ貴重なふり返りの機会になっているようである。

こうして取り組んだ2007年度の学校ボランティアの受入校と参加学生数は、以下のとおりである。

〈小学校〉

- 横浜市立浅間台小学校(西区) — 6名
- 横浜市立寺尾小学校(鶴見区) — 2名
- 横浜市立下末吉小学校(鶴見区) — 1名
- 横浜市立大口台小学校(神奈川区) — 1名

〈中学校〉

- 横浜市立戸塚中学校(戸塚区) — 5名
- 横浜市立松本中学校(神奈川区) — 5名
- 横浜市立栗田谷中学校(神奈川区) — 2名

以上が、2007年度の学校ボランティアの取り組みの概要である。学生がボランティア活動を通して学ぶことができるためには、活動の中で経験したことをふり返ることが重要であるが、2007年度に取り組んでみて、その機会(時間)をつくるのがかなり難しかった。そこで、2008年度には授業として位置づけ、学生も教員もそれを日常的な取り組みとして臨んでいかれるようにしたいと考えた。

3. 2008年度の取り組み

2008年度は、2007年度までの蓄積とその反

省に立って、以下の点をポイントに取り組んだ。まず、学校ボランティアをめぐる取り組みを「授業」として位置づけた。授業科目は、「総合演習」とし、I(前期)とII(後期)を金曜日6限に開講し、教職課程の教員5名(新任教員1名含む)が関わった。正規に登録した学生は数名であったが、すでに「総合演習」履修済みの学生も参加した。学生たちは、おのこの年間を通して週に1日、小学校や中学校で活動しているが、月1回金曜日6限に、教員と学生全員が参加するかたちで、それぞれが学校で経験していることを報告し合い、学び合うこととした。そして、その他にも、同じ学校に行っている者などのグループで集まって、情報を共有したり、困ったことについて共に考えたりする取り組みをするように呼びかけた。

全員が集まって報告し合う授業は、①4月11日(オリエンテーション)、②5月7日、③5月23日、④6月25日、⑤6月27日、⑥7月16日(活動先の先生たちの参加を得ての情報交流会)、⑦10月10日、⑧11月7日、⑨12月5日、⑩1月14日(来年度に向けて学校ボランティアを希望する学生に対してボランティア活動の経験を話す説明会)、⑪1月30日(春季休業中及び来年度の活動に関する相談会)と、年間11回持つことができた。ボランティアに行っている学生全員が正規に履修しているわけではないこともあって、参加人数はその時によって違ったが、少ない時は、教員も含めて全員で経験を聴き合うことをした。多い時は、簡単な報告をした後、小学校グループと中学校グループ(戸塚中グループ+松本中を中心とするその他の中学校グループ)というように、2~3のグループに分かれて話し合いをした。

そこで、より具体的なことを話題にしてふり返ってみると、特に同じ学校に行っている場合には、同じ悩みを持っていたり、困ったりしていることが分かり、問題を共有して、学校で誰にどう相談していくことができるかを考えてみようとするようになった。たとえば、1校に5

人行っていても、1日に行っているのは1人ということになり、先生たちは忙しそうにしているので、何か聞くこともできないのである。しかし、せっかく経験をさせていただいているのであるから、その経験から問題を発見し、その問題を考えることによって学校を理解し、よりよい教育活動をめざしていかれる力の形成につながるようなボランティア活動にしなければならないと考え、前期の終りに開催した「情報交流会」の折に活動先の先生に相談する機会を持つなどの取り組みをした。

以上のようなことから、経験をふり返ることによって経験する場での自分のあり方を学ぶことができるという点で、ボランティア活動のふり返りのための場としての授業の意味を再確認し、2009年度に向けてどう組織していくか検討していこうとしている。また、学生の経験をより意味のあるものにしていくために、活動先の教員との連携の必要性を認識するようになり、学生をボランティアとして派遣する際に、この点について、活動先の学校と相談をしていくことを考えている。

こうして、学生が学校現場を経験することを通して実践的な力をつけることができる活動として、継続的なボランティア活動とそのふり返りの場としての授業という取り組みを中心に、2008年度は学校ボランティアの取り組みをすすめたが、もう一つ、新たな取り組みとして、メーリング・リスト (ML) の活用がある。これは、新任の教員が提案し、立ち上げ、運営しているものであるが、情報の伝達に威力を発揮している。一方、このMLの立ち上げにあたっては、学校に行ったらその日のうちに簡単な記録や感想を書いて投稿することで、学生の間で情報交流や学び合いができるのではないかと、という願いがあったが、その点はいま一つ展開しなかった。情報交流したいという「仲間意識」をつくり出せていないことが背景にあると思われるが、相互に関係することなので、小グループのMLをつくるなど、いろいろ工夫し

ながらいい展開にならないかと、教員の間で検討している。

以上のように、「授業」と「ML」を軸に、学校ボランティアの取り組みをすすめ、約30名の学生が継続的に週に1～2回、小学校・中学校に行き、さまざまな経験をした。2008年度の受入校と参加学生数及びボランティア活動の概要は、以下のとおりである。

〈小学校〉(特別支援学級や普通学級でのアシスタント・ティーチャー)

- 横浜市立浅間台小学校(西区) — 2名
- 横浜市立寺尾小学校(鶴見区) — 2名
- 横浜市立下末吉小学校(鶴見区) — 2名
- 横浜市立大口台小学校(神奈川区) — 3名
- 横浜市立西寺尾小学校(神奈川区) — 1名
- 横浜市立太尾小学校(港北区) — 1名

〈中学校〉

- 横浜市立戸塚中学校(戸塚区) — 5名
(月～金は特別支援などの補助, 土曜は土曜学校「実り隊」で補習担当)
- 横浜市立松本中学校(神奈川区) — 12名
(アシスタント・ティーチャー, 部活動の指導補助など)
- 横浜市立栗田谷中学校(神奈川区) — 3名
(アシスタント・ティーチャー, 特別支援学級の補助など)
- 横浜市立老松中学校(西区) — 2名
(国際教室の外国籍生徒の放課後サポートなど)

なお、学生が自らの活動をふり返った記録としての「学校ボランティア通信」は、夏休み前の「情報交流会」に向けて、2008年7月16日に No.8(小学校特集), No.9(戸塚中特集), No.10(松本中・栗田谷中・老松中編)を発行した。

以上が、2008年度「学校ボランティア」の教職課程としての取り組みの概要であるが、学生が教員になっていくにあたって必要とされる

「実践力」の形成に、学校での経験とそのふり返りは必須であると位置づけ、2009年度に向けてさらに展開していかれるように、教員の間で相談をすすめている。